

仏教と人権

——「浄土真宗本願寺派と部落差別」を中心として——

栗 山 俊 之

はじめに

右記の研究課題において、浄土真宗本願寺派と部落差別との関係の構図を考察しながらその問題点を明らかにし、人権と向き合おうとする浄土真宗本願寺派の、ひいては仏教諸宗派の課題を浮き彫りにし、仏教は人権とどうかかわるのかということについて見ていきたい。しかしながら、紙幅の都合上、本稿ではその枠組みを提示するにとどめ、詳細については、別稿を期すこととしたい。

一、人権について

ことさらに繰り返すまでもないのだが、人権とは、あらゆる人が、人であるという一点において、等しく尊ばれるというありようを、人間の具体的営みの中に実現させようという理念である。つまりそれは、すでにあるものではなく、まさに「不斷の努力」を通して獲得されるべき地平としてあ

る（したがってむろん「不斷の努力」には、人権を損なうもの——たとえば差別——をどのようにして切り崩していくかということが含まれている）。そしてそうした地平の実現は、人間に平等な尊厳性を認め、生きようとする人びとが広範に（「広範に」というのも、人権という理念は、人間に平等な尊厳性を認めないと考える人をも尊重しなければならないという矛盾を内包しているからである）存在することによってはじめて可能となる。人権とは、人間の平等な尊厳性を基盤とし、それをそこなうものとの対峙を不可欠とするのである。そして、次に略述するように、仏教・浄土真宗の本来的ありようは、そうした人権を支え得るものとしてあつたはずである。

二、仏教の根本的立場

仏教はその根本的立場において無我を説く。無我とは、あらゆるもの（人間のみではなく）が、その個別的存在（Ⅱ我）を超えた、不可思議なるはたらきによって、それとして存在

しているということである。人は人として、私は私として、花は花として、あるいは宇宙は宇宙として何故存在しているのか。われわれには、われわれの思議を超えた何かしら大いなるはたらきによつて、それぞれがそれぞれとして存在しているとしか言いようがない。あらゆるものをそれとして、その存在を支えている尊いもの。それはあらゆるものに等しくはたらきかけている。すなわちすべてのものが、不可思議なる、大いなるはたらき（＝それを仏教では如来といい、仏といひ、真実なるものと捉える）のあらわれとしてある。かくして仏教は、あらゆるものが等しく尊ばれるべきなのだと教え、人を不可思議としか言いようない生まれによつて差別するカースト制と対峙する。

三、親鸞のぎりひらいた宗教的地平

親鸞は『大無量寿経』に説かれている阿弥陀仏の「本願」の世界に真実を見出した。彼は、あらゆるものに等しくはたらきかけている、すべてのものを等しく真実たらしめようという仏の願いに目覚めることによつて、それを与えられているに相應しく生きようとし、それによつて切り開かれていく、すべてのものが等しく尊ばれる世界的状況のなかで築き上げようとした。たとえば、「下類」、すなわち当時の社会において「いし・かはら・つぶてのごとく」踏みつけにされ

ていた「れふし・あき人・さまさまのもの」、そこに親鸞は「われら」と、自らを置き、そしてその「いし・かはら・つぶてのごとなるわれら」が浄土真宗の信によつて「如来とひとし」い尊厳性を与えられているのだということを明らかにしていく。そのことによつて真宗の信に立つ人びとは、自らの尊厳性を自覚し、「われら」を「下類」と蔑む価値観から解放され、等しく尊厳性をもつものとして連帯していった。（拙稿「親鸞―その信とそれにもとづく社会的ありようについて―」

『日本思想史における国家と宗教』上巻所収参照）

四、浄土真宗本願寺派教団と人権

見たように、本来の仏教・浄土真宗は、人権の基盤となり、それを支え得るものであった。しかしながら、近代以降、わが国に人権思想が移入された時点において仏教・浄土真宗は、すでに体制化を終えていた諸教団に見合うものへと変質していた。たとえば浄土真宗本願寺派におけるその教えの変質過程、およびその後の教団における教学のありようと人権とのかわりの構図について簡単に触れれば、（詳しくは拙稿、「『真俗二諦』の成立」「仏教 その文化と歴史」所収・『戦時教学』―「真俗二諦」の帰結―『戦時教学と真宗』第二巻解説論文・「平和の教学」へ向けて」「知と信」所収参照）おおよそ次のようである（他の仏教諸教団においても大同小異であった）。

近代になると本願寺派教団は、新たに誕生した神道唯一主義に立つ天皇制国家のもとでむかえた「教団存亡の危機」のもとで、そうした国家に順応するために、それまでの教学路線を基盤としながらも、さらにそこから大きく踏み出す新たな「教学の枠組み」を打ち出した。それが、その後の教団の歴史的・社会的ありようを根底から規定することとなった「真俗二諦」である。それまでの真宗理解を踏襲しながら、その教えの領域を「真諦」として括って死後の往生浄土とそれを保障するための信心の獲得のみに集約させて説き、同時に、そうした真宗の教えとは全く別の領域のこととして、この世における支配秩序の遵守を、「真諦」と並立する今一つの世俗の真実、すなわち「俗諦」として説いたのである。こうして「真俗二諦」は、真宗を信じることで、この世界を生きたことを全く切り離してしまい、以後の教団は、真宗から社会を問うこともなく、世俗のありようを無批判に受容し、追従していったのである。たとえば国家がその総力をあげて戦争を遂行すれば、教団は「真俗二諦」の名の下に「のちの世は弥陀の教えにまかせつつ命をやすく君にささげよ」と真宗者を教導しながら、全力で戦時奉公に邁進した。また、敗戦後、平和主義・民主主義が国是となれば、突如として真宗は「真の平等主義、而も宗教的信念に裏付けられたる民主主義的思想」となった。戦時には「戦時教学」を生み出してまで

も戦争遂行に全面協力し、「平和」となれば「平和」を説く。真に真宗に基礎付けられることのないこうした状況追隨に終始する教団であれば、差別を事とする世の中において、差別を問い得ず、自らそれを内在化させていったのも、ある意味では当然であった。そして同様に、差別が問題にされ、人権が重視される世の中であれば、それに帳尻を合わせるようにして差別を、人権を語っていくのである。

おわりに

だとすれば教団は、何を問題にし、清算し、如何なる立場を回復し、差別、あるいは人権とどのように向き合っているか、ねばならないか。

紙幅が尽きたようである。別稿において、昨今の浄土真宗本願寺派の部落差別とのかかわりを通して、見ていきたい。

（キーワード） 浄土真宗本願寺派、浄土真宗、親鸞、部落差別、人権

（筑紫女学園短期大学講師）